第42回埋蔵文化財調査資料展

# 盛岡を発掘する ―令和6年度調査速報―

## 調査成果報告会　資料

日　時　　令和7年3月2日(日)　13:30～16:00
会　場　　盛岡市遺跡の学び館　研修室

○大新町遺跡　　○右京長根遺跡
○木節遺跡　　○国史跡 盛岡城跡

盛岡市 遺跡の学び館

第 42 回埋蔵文化財調査資料展「盛岡を発掘する―令和６年度調査速報―」関連事業

# 令和６年度調査成果報告会

| | | | |
|---|---|---|---|
| 13:30～ | 開会あいさつ | | |
| 13:35～ | 大新町遺跡 | 文化財主事 | 杉 山 一 樹 |
| 14:00～ | 右京長根遺跡 | 文化財主事 | 田 老 茜 理 |
| 14:15～ | 国史跡 盛岡城跡 | 文化財主事 | 今 松 佑 太 |
| 14:50～15:00 | 休憩 ※換気のため、窓を開けさせていただきます | | |
| 15:00～ | 木節遺跡 | 文化財主査 | 今 野 公 顕 |
| | | 文化財調査員 | 佐々木 あゆみ |
| 15:50～16:00 | 質疑応答 閉会 | | |
| 16:00～16:30 | 展示室にて発表者による展示解説 | | |

●配布資料　目次


大新町遺跡 ..... 1

右京長根遺跡 ..... 9

国史跡　盛岡城跡 ..... 13

木節遺跡 ..... 23

# 大新町遺跡第90次発掘調査

文化財主事　杉山一樹

## ○大新町遺跡とは…

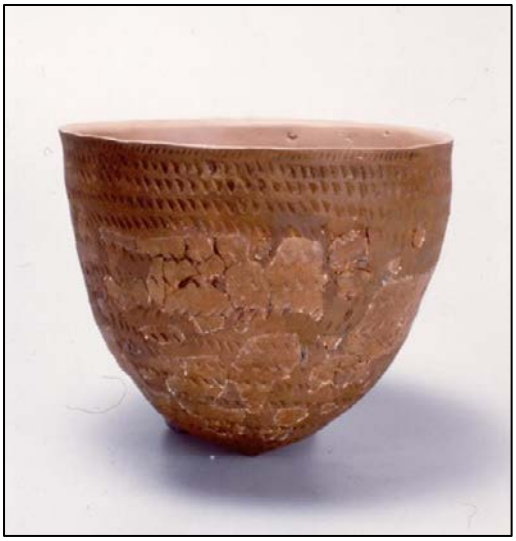
大新町遺跡は、JR盛岡駅から北西へ約2.3kmにある大新町地内に所在する遺跡です。
遺跡は岩手山を起源とするなだれ堆積物（滝沢泥流）を基盤とし、その上に火山灰が覆った火山灰砂台地（滝沢台地）の南側に位置しています。
台地上およびその周辺には本遺跡のほか、県指定史跡の大館町遺跡や小屋塚遺跡など、縄文時代～近世にかけての遺跡が多く確認されています。

## ○大新町遺跡～発見の経緯～

・昭和42年（1967）に、武田良夫氏が大新小学校の近くで行われていた宅地造成工事の際に、土器のかけら（押型文土器）を採取したことで発見されました。
・昭和44年（1969）の考古学ジャーナル第36号にて紹介。
→発見した土器は、縄文時代早期初頭の「日計式土器（ひばかりしきどき）」とは異なり、日計式に後続する土器型式であることを発表しました。
（当初は「小屋塚式」と呼ばれたが、のちに「大新式」に変更）
・考古学ジャーナルに紹介された同年（1969）秋の調査では、押型文土器の明確な資料と共に、早期中葉の土器（貝殻文土器）の下層から出土する層位的事実を確認しました。
（武田氏が遺物が出土すると目していた場所で住宅新築工事が始まることを察知し、施主と交渉の末、吉田氏・草間氏らと共に発掘調査を行った）
→大新式土器は、押型文（早期前葉）から沈線文・沈線貝殻文（早期中葉）に移り変わる過渡期の土器であることが判明しました。

## ○これまでの調査

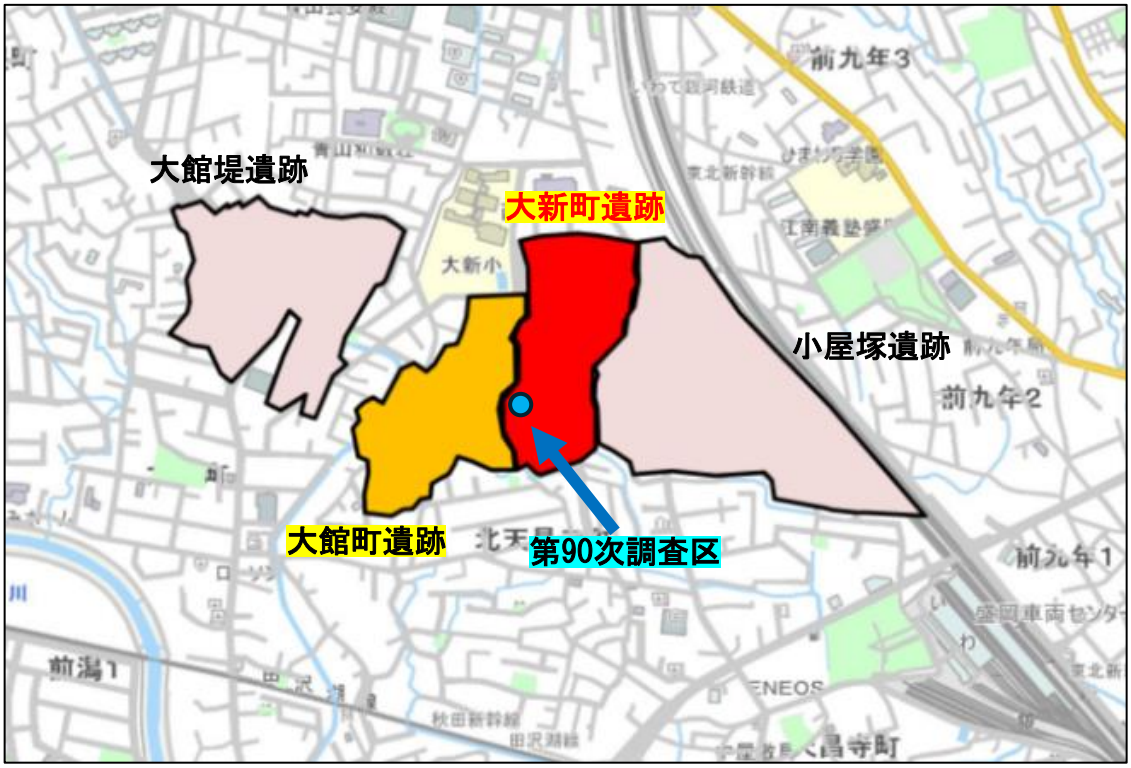
・当市教育委員会による発掘調査は昭和57年（1982）以降行われています。
・これまでの調査で、大新町遺跡は東北地方でも数少ない縄文時代早期の遺跡であり、発見者である武田氏の見解を裏付ける結果となっています。
→特に早期前葉の押型文土器は、東北地方でも数少ない貴重な遺物です。
・遺跡内には早期の土器や石器を含む遺物包含層のほか、早期の竪穴建物跡７棟も確認しています。
・第19次調査（1985）・第21次調査（1986）では早期よりも古い縄文時代草創期の土器（爪形文土器：約１万年前）が出土しました。
→遺物の出土はあるものの、遺構は確認されていない。
・大新町遺跡の西側には県指定史跡の大館町遺跡があり、縄文時代中期を主体とする集落を確認しています。
・大館町遺跡で集落が形成された時期に造られた貯蔵穴と考えられる土坑群が、大新町遺跡や小屋塚遺跡で確認され、台地縁辺部に土坑群が形成されていました。
・大新町遺跡と小屋塚遺跡の間にある埋没谷（まいぼっこく）には、縄文時代後期の遺物包含層が確認されています。
・古代末（11世紀ごろ）の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、大溝跡、柵・柱列跡の遺構と共に同時期の土器群も出土しいます。
・現在は大館町遺跡の史跡公園範囲を除き、宅地となっている
**→現代にいたるまで、人々が生活しやすい重要な土地である。**



**大新町遺跡出土　草創期の爪形文土器**

## ○第90次調査

- 第90次調査は個人住宅建設に伴う工事に際して行われました。
（令和５年度に試掘調査を行い、遺構・遺物を確認したことから本調査となった）
- 調査面積：153.29㎡
- 調査期間：令和６年５月14日～同年６月11日
- 調査区を東側・西側に分けて２段階で調査を行いました。



## 調査区全景

東側調査区

西側調査区

## 調査作業風景

東側調査区

西側調査区

# ○第90次調査の成果

## 遺構～遺物包含層～

調査区東側では、縄文時代早期の遺物包含層を確認し、土器や石器が多く出土しました。

（調査区東側は西側に比べ地形がやや低くなっており、地形が高い西側は、

旧建物による削平で遺構・遺物は確認できなかった）

## 遺物～縄文時代早期の遺物～

・今回の調査では、縄文時代早期前葉から中葉にかけての土器や石器が出土しました。
・土器は早期前葉の押型文土器や早期中葉の貝殻文土器などが出土しました。
・押型文土器は、遺跡発見者である武田氏の地道な研究と実験により、施文方法が判明した重要な土器です。

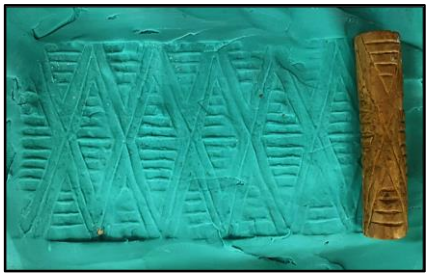
### －押型文土器－

・縄文時代早期前葉の土器。
・押型文土器は、円柱状の棒の表面に彫り込みを入れたものを、器面に押し付けながら転がして（回転圧痕）施文します。

**～押型文の作り方～**

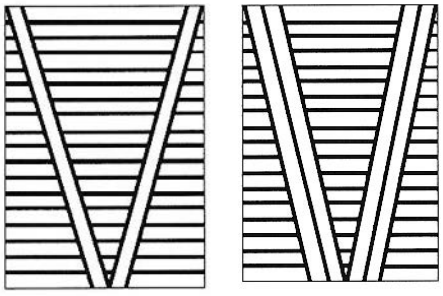
①円柱状の棒を用意します
（長さ５cm程度・太さ１cm程度）

②棒に横線や斜線などを
彫り込みます

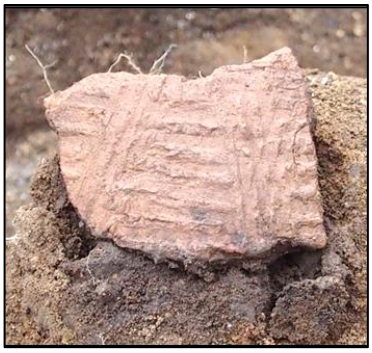


③彫り込みを入れた棒を土器に
押し付けながら回転させると、
文様が施されます

・彫り込みの文様は多様で、これまで大新町遺跡や大館町遺跡で発見された押型文土器は、V字状・X字状・Y字状　長菱形・格子目状・縦割状とあります。
・今回出土した押型文土器では、<u>V字状</u>が多いです。



**横線V字状文**



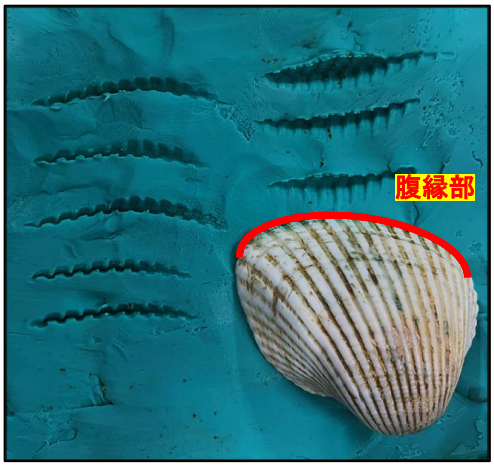
## ー貝殻文土器ー

・縄文時代早期中葉の土器。

・貝（主に二枚貝）や棒・ヘラ状工具などを用いて施文します。

・文様は貝の種類によって異なるほか、押し当てたり引っ張ったりなどで、様々な文様が施されます。

### ～貝殻文の作り方～




**貝殻腹縁文**

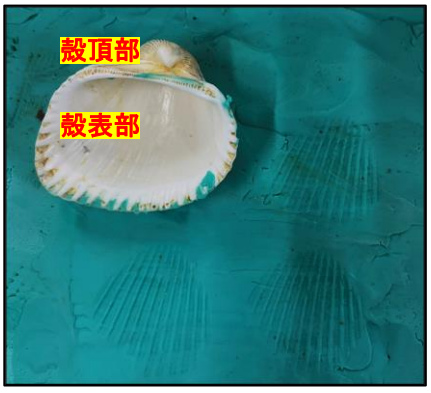
貝殻の腹縁部を押し付けて施文すします。
貝殻の角度や方向、時には連続させたりして、様々な文様を施します。

**貝殻条痕文**

貝殻の腹縁部を放射肋と平行方向に引きずって施文します。
器面の調整にも使用されました。

**貝殻腹縁押引文**

貝殻の腹縁部を押し当てて、途中で止めながら引きずることで施文されます。




**貝殻殻表・殻頂圧痕文**

貝殻の殻表部（殻頂部）を押し当てて施文します。

## 貝殻文の貝はどこから？

・貝殻文に使われた貝は、サルボウガイやアカガイ・ハイガイであったと考えられます。
・どちらも海辺の砂～泥地に住む貝であるため、内陸部の盛岡には生息していません。
・おそらく三陸沿岸部や青森県八戸市周辺から交易等によって持ち込まれたと考えられています。
　→当時から交流が行われていた証拠？

### その他の土器（縄文時代早期）

押型文と沈線が施された土器

爪形状刺突が施された土器

爪形状刺突と貝殻文が
施された土器

## ー石器ー

- 縄文時代早期の石器も出土しました。

**石鏃（せきぞく）**
矢の先端に付けて使用する狩猟具

**掻器（そうき）**
皮をなめしたり、削る際に使用

**敲石（たたきいし）**
木の実などをたたいたり、
磨りつぶす際に使用

**削器（さっき）**
木や骨・肉を切ったり
削ったりする際に使用

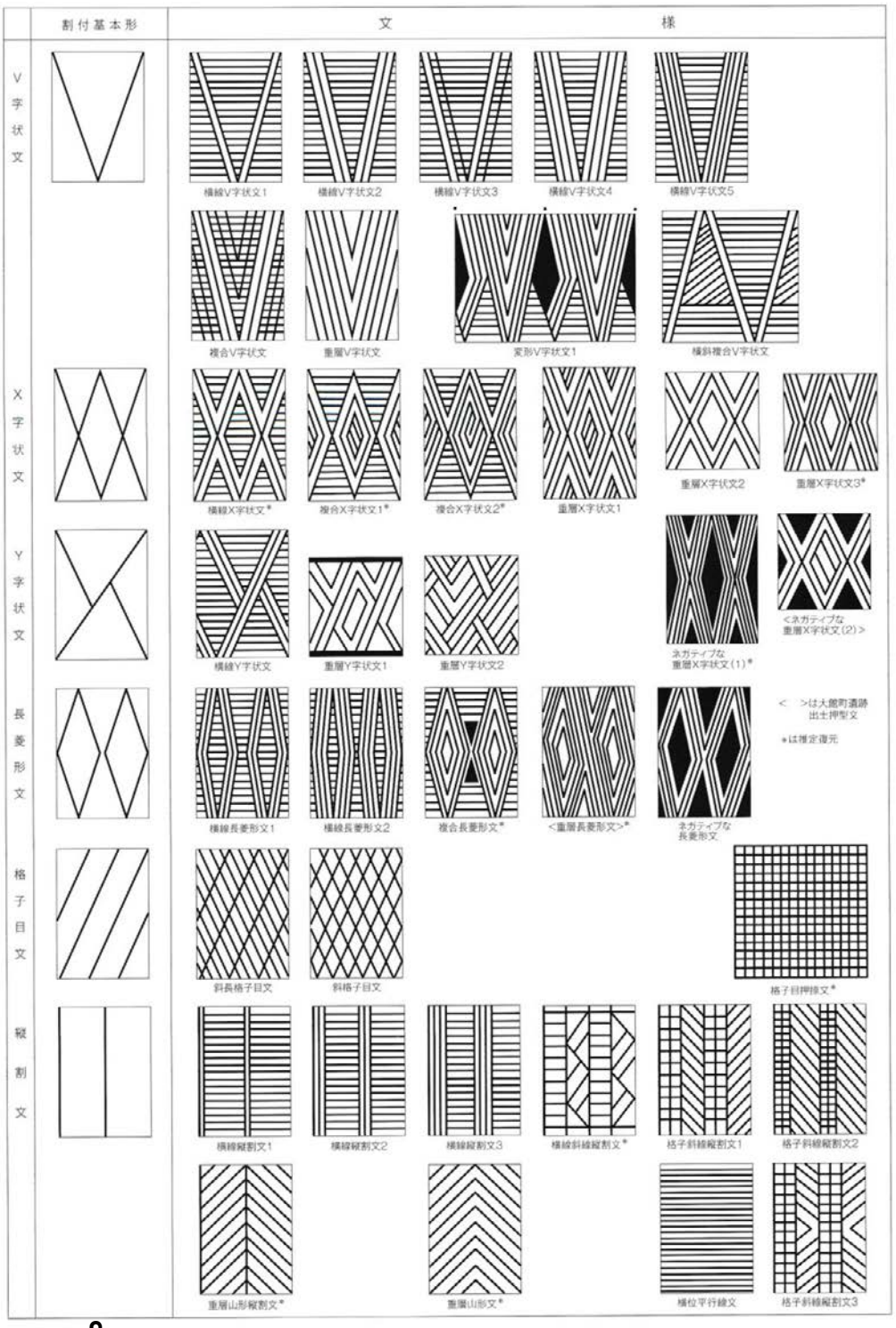
# 調査のまとめ

・今回の調査では、縄文時代早期の遺構・遺物を確認しました。

・西側は旧建物で削平されていましたが、東側では早期の遺物包含層を確認しました。

・早期前葉の押型文土器・早期中葉の貝殻文土器など、これまでの発掘調査で確認している遺物が出土しました。

・地形の高い所へ移動しながら、当時の人々は生活していたと考えられます。
（地形が高くなるほど、出土する土器が新しくなる）




大新町遺跡出土
押型文土器
文様模式図

# 右京長根遺跡 第５次調査

文化財主事　田老 茜理

## 1　右京長根遺跡 第５次調査の概要

右京長根遺跡は、縄文時代の遺跡として、遺跡台帳に登録されている遺跡です。

今年度、宅地造成工事にともない、平成21年度に行った試掘調査（第２次調査）で遺構が確認されていた範囲について、本発掘調査を実施しました。

今回の発表では、調査で確認された遺構を紹介します。

調査風景

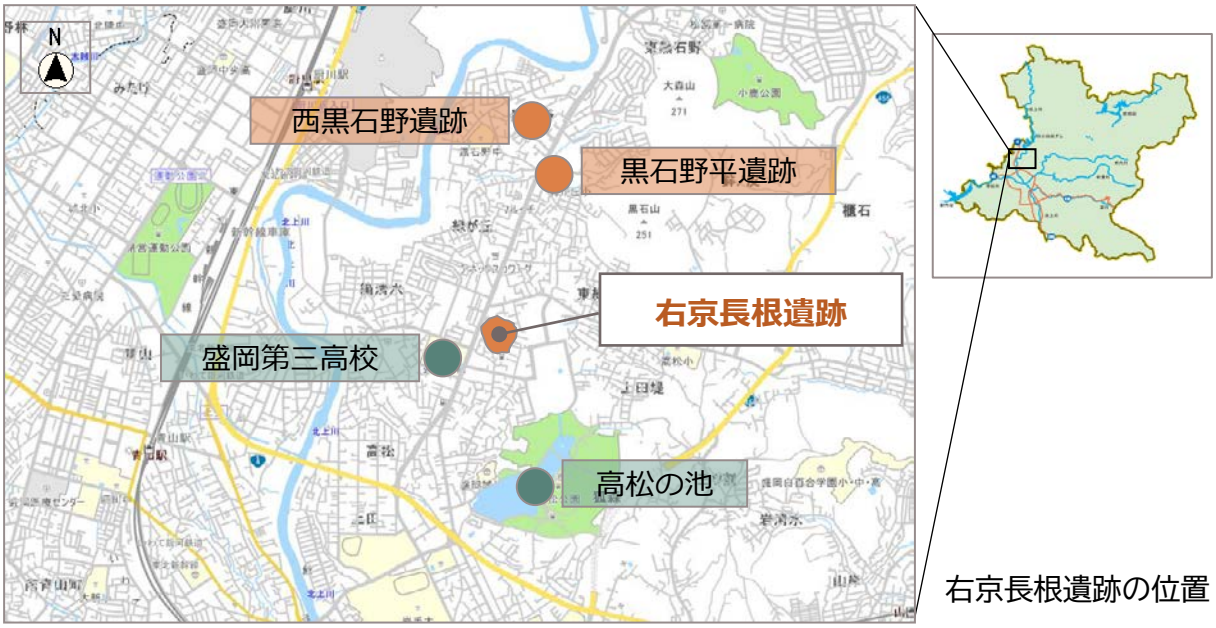
**遺跡の所在地**
盛岡市緑が丘一丁目地内

**調査期間**
令和６年10月15日～令和６年11月22日

**調査面積**
1,056㎡

**調査結果**
遺構：Ｔピット（陥し穴状土坑）12基
遺物：縄文土器・石器 コンテナ箱0.5箱分

## 2　遺跡の環境




右京長根遺跡の位置

右京長根遺跡は、盛岡駅から北北東に約3.4㎞の緑が丘地内に所在し、北上川東岸の丘陵に位置しています。

遺跡を含む周辺の地域は、丘陵を刻む沢によって浸食され、起伏の多い地形になっています。右京長根遺跡近隣の西黒石野遺跡や黒石野平遺跡では、この起伏の多い地形上において、数多くのＴピット（陥し穴状土坑）が発見されていました。

## 3　発見された遺構

今回の調査では、過去の試掘調査（第２次調査）で遺構が確認された範囲について、北東側の調査区をⅠ区、南西側の調査区をⅡ区として本調査を実施しました。

調査区は南西から北東方向に傾斜する地形で、Ⅰ区から６基、Ⅱ区から６基のＴピットが見つかりました。

右京長根遺跡 第５次調査区

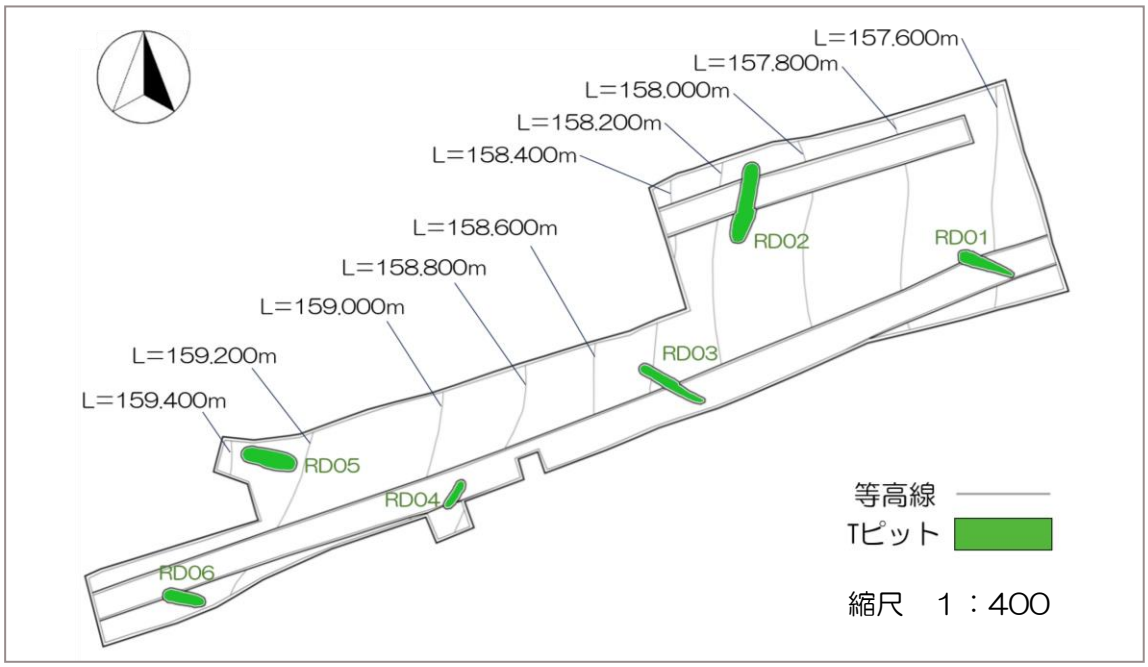
### Ｔピット
### （陥し穴状土坑）

形状や配置から、シカやイノシシなどの動物を捕獲するための陥し穴として利用されたと考えられる土坑（人為的に掘られた穴）。「トラップピット」を略して「Ｔピット」と呼ばれます。

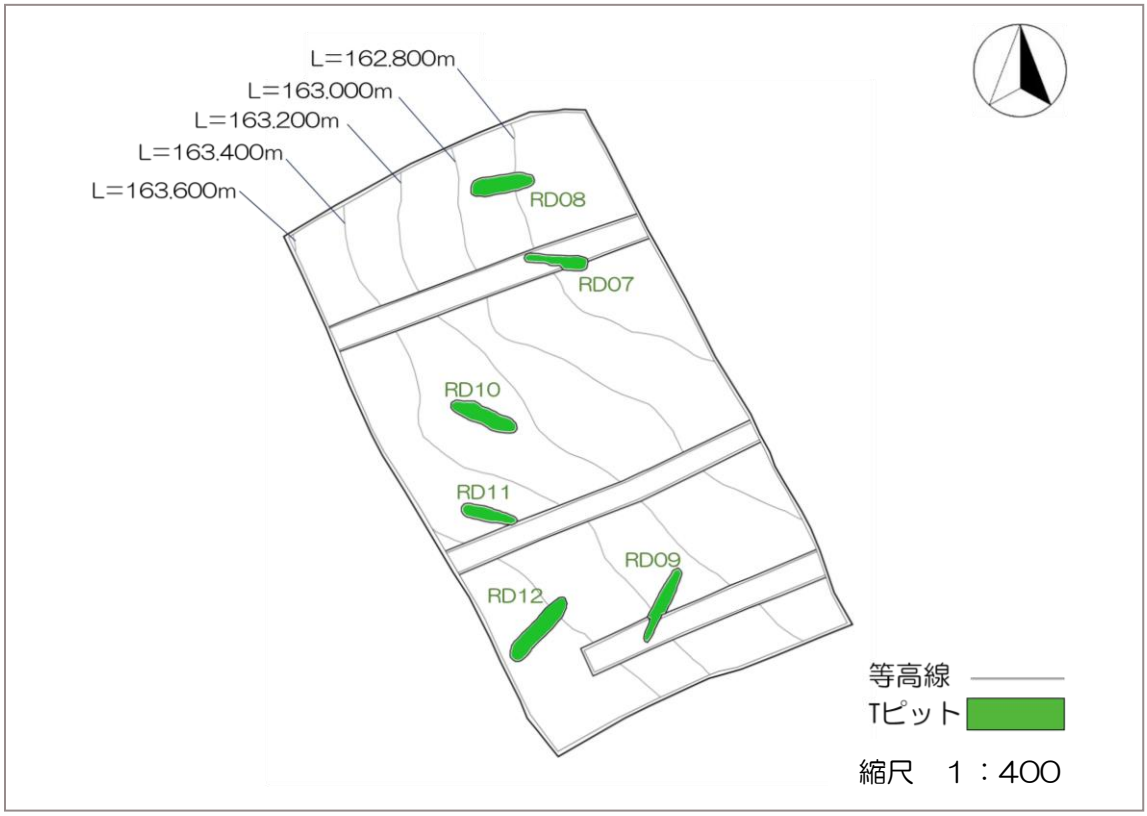
溝状で穴の底に近いほど幅が狭まるものや、楕円形で穴の底に杭を打った跡があるものなど、さまざまな形状があります。今回の調査では、溝状のＴピットが見つかりました。

RD09土坑

RD09土坑断面




右京長根遺跡 第5次調査区　全体図（Ⅰ区）




右京長根遺跡 第5次調査区　全体図（Ⅱ区）

今回見つかった12基のＴピットのうち、多くのＴピットは、等高線に直交するように配置されていました。

また、Ⅱ区では、Ｔピットが一定の間隔で並ぶ様子が確認できることから、調査地は、動物が集まる「けもの道」上に複数のＴピットが並べて作られていた可能性があります。

## ４　おわりに

- 今回の調査、過去の調査によって、右京長根遺跡に、その形状や配置から動物を捕獲するための陥し穴と考えられる「Ｔピット」がつくられていたことが確認されました。
- 今回の調査では、Ｔピットが斜面に並ぶように見つかったことから、丘陵地にある「けもの道」上にＴピットが配置されたことが予想されます。
- Ｔピットは今回の調査区外に続く可能性もあり、今後の調査で、配列の規則性や特徴を明らかにしていくことが課題です。

# 国史跡 盛岡城跡 第 37 次・47 次・44 次補足調査

盛岡市遺跡の学び館 文化財主事 今松佑太

## 1. 盛岡城跡の概要

国指定史跡 盛岡城跡は、盛岡市の中心市街地である内丸に所在し、盛岡藩南部氏の居城跡です。その城下町は岩手県の県庁所在地として栄えた近代以降の市街地の骨格となっています。豊臣政権下の慶長2年(1597)3月6日、戦国大名であった南部信直(初代盛岡藩主)が嫡男利直(2代藩主)に命じて築城が始められたといわれています(築城開始年次については諸説あり)。藩政時代初期には三戸城(青森県三戸町)、福岡城(二戸市)、郡山城(紫波町)を居城としながら築城が進められましたが、寛永 10 年(1633)5月に3代藩主南部重直が入城して以来、明治維新の廃藩置県に至るまで、南部氏の居城として存続しました。

※盛岡藩初代藩主については、江戸幕府成立をもってする「利直初代説」もあります。

## 2. 地形と構造

現在の岩手公園(愛称:盛岡城跡公園)である内曲輪は、旧北上川と中津川の合流点にある花崗岩質小丘陵を利用して築かれており、本丸、二ノ丸、三ノ丸、淡路丸(腰曲輪)は総石垣となっています。内曲輪の北側には、堀と中津川、土塁で区画された外曲輪があり、藩主居館「御新丸」や重臣屋敷が存在しました。そのさらに外側に、長大な堀と土塁で区画された遠曲輪があり、外曲輪の西側、北側と、中津川を越えた北東側、東側、南東側、南側を囲んでいました(第1図)。

第1図 盛岡城跡、外曲輪跡、遠曲輪跡 位置図

盛岡城の本来の範囲は、このように内曲輪から外曲輪、遠曲輪を扇状に配置する三重構造の梯郭式縄張りとなっています。

内曲輪は、本丸を頂点とし二ノ丸、三ノ丸と段下がりに連なる連郭式縄張りとなっており、連郭式と梯郭式が組み合わさった複合式縄張りは東北地方北部では珍しく、盛岡城の特徴の一つです。

また、盛岡城の石垣は構築と修復を長い期間にわたって行ったため、10 数種類もの積み方が存在します。

これも盛岡城の大きな特徴の一つで、城内とその周辺で石垣石材である花崗岩が採れた盛岡城ならではと言えるでしょう。

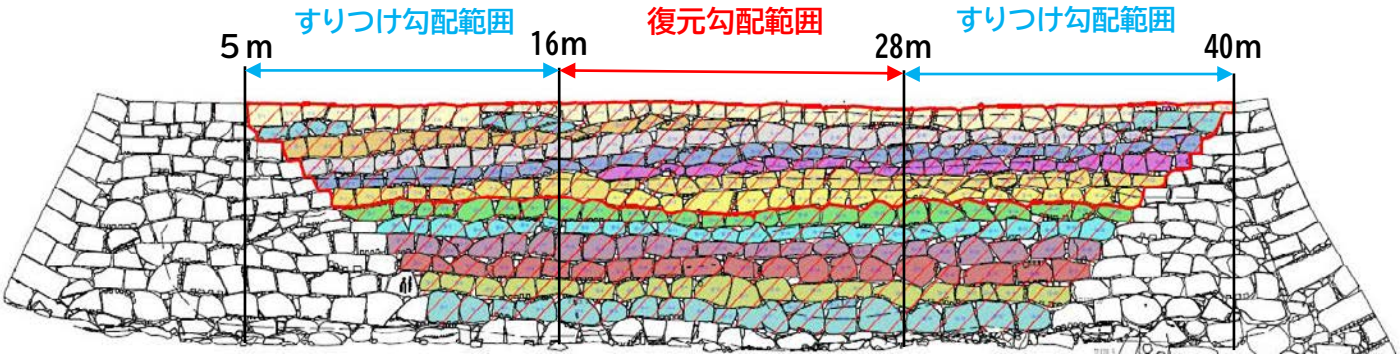
## 3. 第 37 次調査（三ノ丸地区）

### ○三ノ丸北西部石垣について

三ノ丸北西部北面は、元和3年（1617）頃に築かれた乱積[1]の石垣でした。しかし、度重なる地震等により石垣が損傷し、崩落の恐れがあったことから宝永2年（1705）に積み直された布積[2]の石垣です。その際、修復を命じられた家臣の名前が刻まれた石が残されています（普請奉行銘石）。

盛岡城跡では平成 11 年度より目視による石垣変位箇所の状態を、数値に基づく客観的データとして表すために石垣変位調査を実施していますが、この三ノ丸北西部は石垣修復を検討する基準の一つである累積変位量が 10 ㎜を超えていました。また、標準の石垣勾配よりも鉛直上に最大 70 ㎝の孕み出しが見られることから、緊急的な解体修復が必要な石垣でした。

そこで盛岡市では、令和3年度から4か年の計画で石垣の解体修復工事に着手しました。今年度は積上げ工事の最終年度となっており、石工職人による積上げの技法や、どのように元の位置に石を戻していくのかなどの記録調査を行いました。




第2図　三ノ丸北西部北面石垣　立面図

### ○石垣修復の方針

(1)現状石垣の不安定さを解消する修理とし、「歴史の証拠」であるオリジナルの石垣をできる限り残す。

(2)根本修理とはせず、孕みのある石垣も「歴史の証拠」として許容し、最低限の修復範囲とする。

(3)普請奉行銘石は動かさない（修復範囲に含めない）。

盛岡城跡の史跡の価値を維持し、石垣を未来へ残すためにこの3点の方針で修復工事を進めています。

解体直前の石垣

令和4年度解体完了状況

[1] 大小様々な石を不規則に積む方法

[2] 一段ごとに横目地が通る積み方

## ○築石の積上げ

① 石材の積上げ
クレーンを使用し、石材を持ち上げ、積む場所へ慎重に仮置きします。

② 築石の位置確認
上下段や左右にくる石との接点を見ながら、バランスを確認します。

③ 築石の調整
カジヤ（調整に使用する金属棒）で、築石の位置や角度を微調整します。

④ 設置状況の再確認
丁張につけられた水糸で勾配（角度）を再確認します。ズレがある場合は再度調整を行います。

## ○介石（艫介石・胴介石・迫介石）、押え石、間詰石、栗石の設置

艫介石の設置
築石の石尻には、安定を増すため、また勾配の調整をしやすくするために艫介石を設置します。

艫介石の設置状況
艫介石を設置し、築石を積んだ状況です。
築石の下に空洞ができてしまいます。

胴介石、栗石の充填

空洞部に胴介石、栗石を充填します。これにより築石にかかる荷重が分散し、損壊予防にもなります。

押え石の設置

控え（長さ）の短い築石が背面に転がるのを防ぐために押え石を設置します。

間詰石の設置

石垣の前面から築石同士の隙間を埋めるように間詰石を設置し、見栄えもよくなります。

栗石の敷き詰め

1段分の積上げが終わったら、背面に栗石を敷き詰めていきます。手詰めで行われています。

**積み上げ完了状況**

## 4. 第 47 次･第 44 次補足調査(本丸地区)

【第 47 次調査】

調査地点：本丸南西部

調査原因：史跡整備に伴う事前確認調査

調査期間：令和 6 年 8 月 20 日～10 月 31 日

調査面積：105.37 ㎡

検出遺構：本丸御殿に伴う礎石 6 石、江戸末期の整地層

出土遺物：丸瓦、平瓦、陶磁器、鉄製品

【第 44 次補足調査】

調査地点：本丸南東部

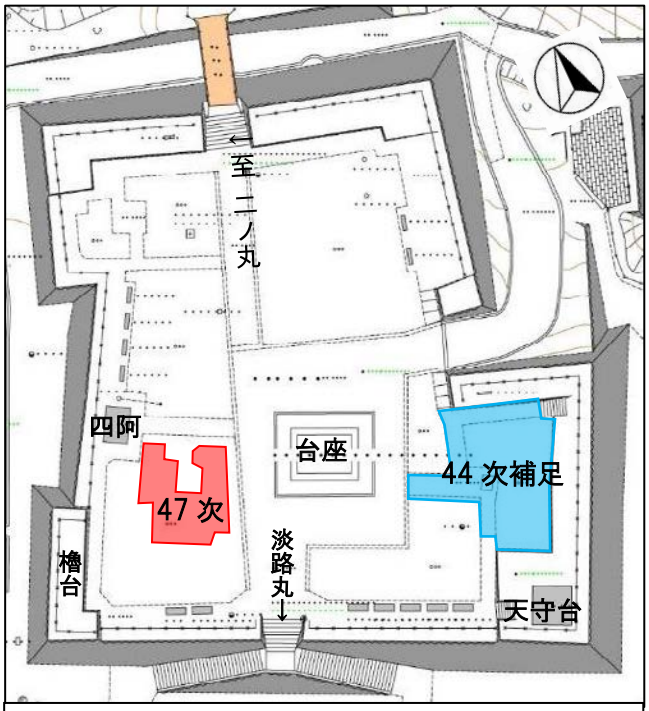
調査原因：史跡整備に伴う事前確認調査

調査期間：令和 6 年 8 月 20 日～10 月 31 日

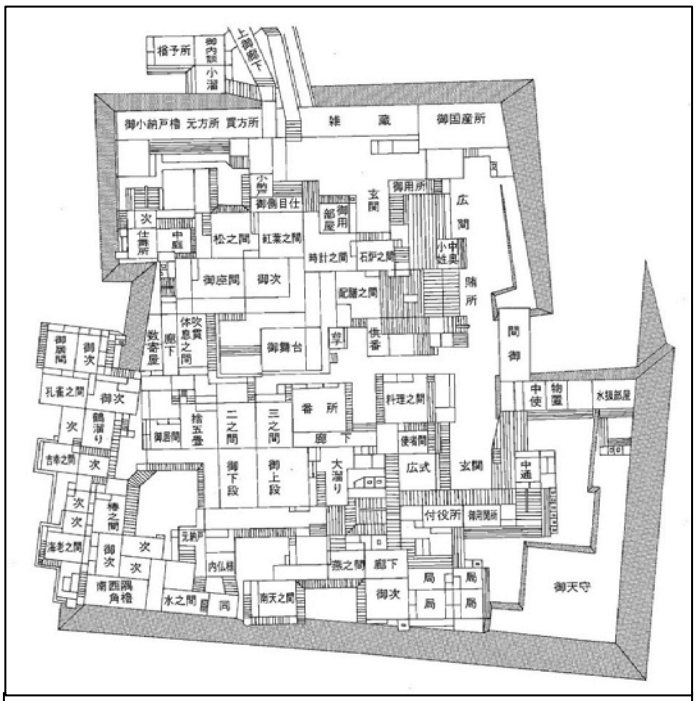
調査面積：174.67 ㎡

検出遺構：防空壕跡

出土遺物：軒丸瓦、平瓦、陶磁器、古銭、昭和の廃棄物（ガラス瓶、猪口等）




第3図　本丸地区調査地点　位置図



第4図『霊承院様御代大奥御住居図(写)』（江戸後期）

### ○本丸御殿について

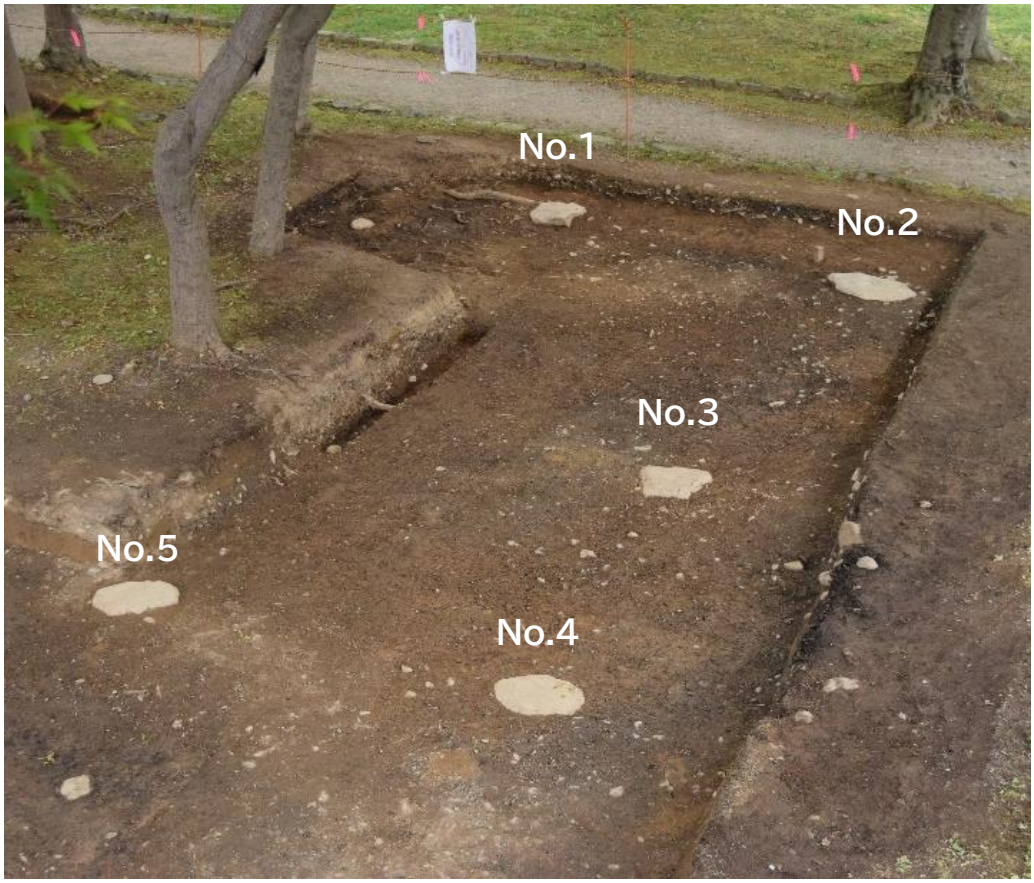
江戸時代、盛岡城の本丸には「本丸御殿」という建物がほぼ隙間なく建てられていました。江戸時代後期の資料を参考にすると、一階約 116 室、二階約 45 室、三階約 10 室を数えます（第4図）。御殿の役割は、一言で説明すると「政庁」と「城主の居住空間」です。現代で例えるなら「都道府県庁」と「知事の公邸」の機能を一つの建物に集約したようなものと考えられるでしょうか。

盛岡城の本丸は敷地の南北で大きく二分割されます。北半部は「側」といい、藩の政務を統括する政庁機能を持ち、南半部の「奥（大奥）」は藩主や一族の居住機能を持ちます。本丸の北側には二ノ丸が続き、そこに石垣で囲んだ一画を設け、中ノ丸御殿が造られています。そこでは家老以下の役人が政務を行ったり、城中の儀式を執り行う建物などが存在していました。本来であればすべて本丸の敷地内に集約されるところですが、面積が狭かったこともあり、廊下橋で繋がれた二ノ丸にも機能が分散されました。

**○礎石建物跡（本丸御殿）**

公園の現地表面から約−30 ㎝の深さで、礎石がコの字に5石並んで発見されました。使用された石材は安山岩系であり、大きさは約 64 ㎝～32 ㎝です。樹木の根に押されたり、公園整備の際に動かされ原位置を留めていないと思われる礎石もありますが、江戸時代に使用された間尺である6尺3寸（約 192 ㎝）が残っている部分も確認できました。また、それぞれの礎石には、柱を据えるときの目印とされる「×印」や刻印等はありませんでした。

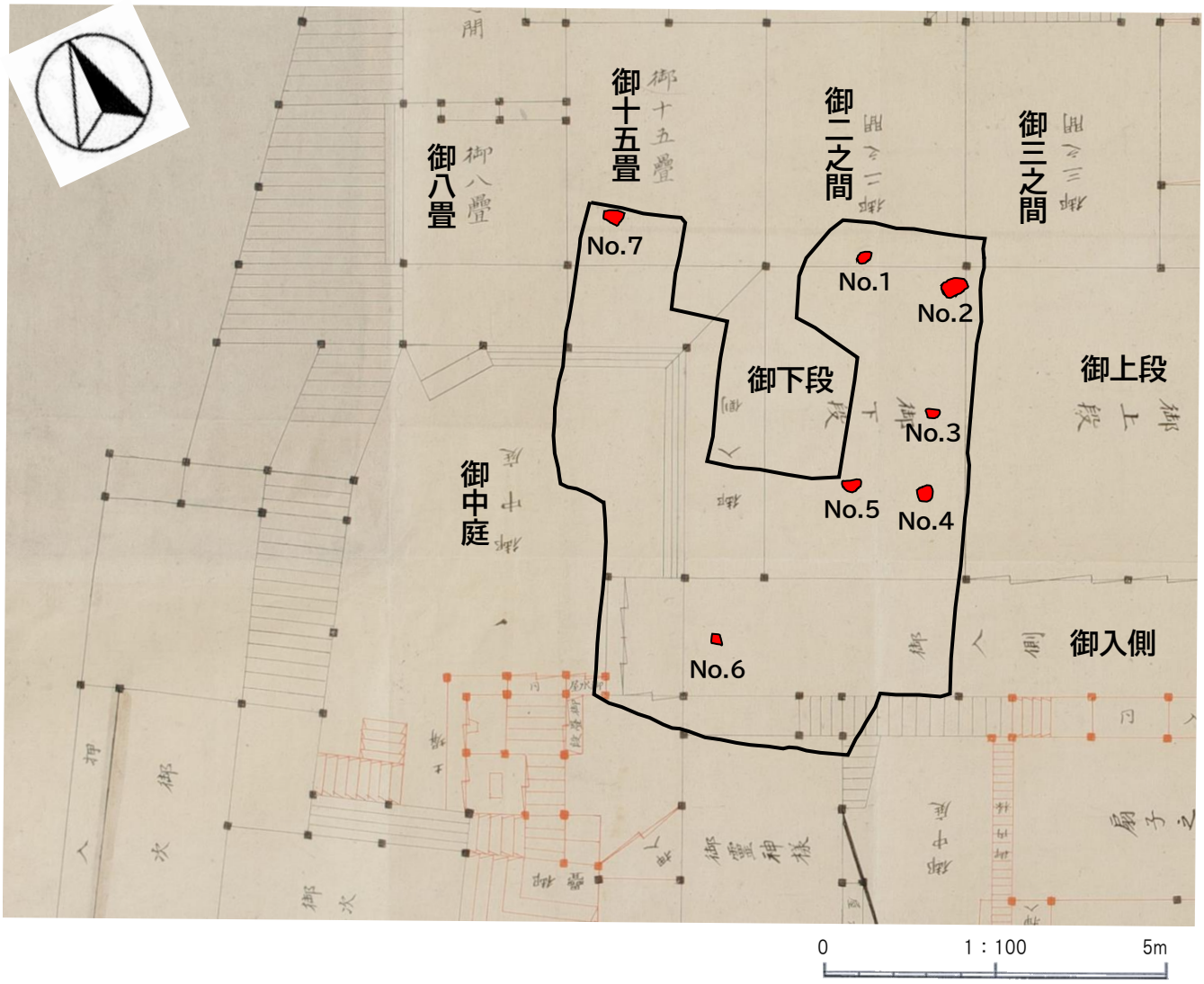
発見された礎石を絵図面と照合すると、「御二之間」、「御三之間」、「御下段」、「御十五畳」、「御入側」付近と推定されます。いずれも藩主の寝室や格式の高い諸室が並んでいた辺りであることがわかります。




第 47 次　礎石検出状況

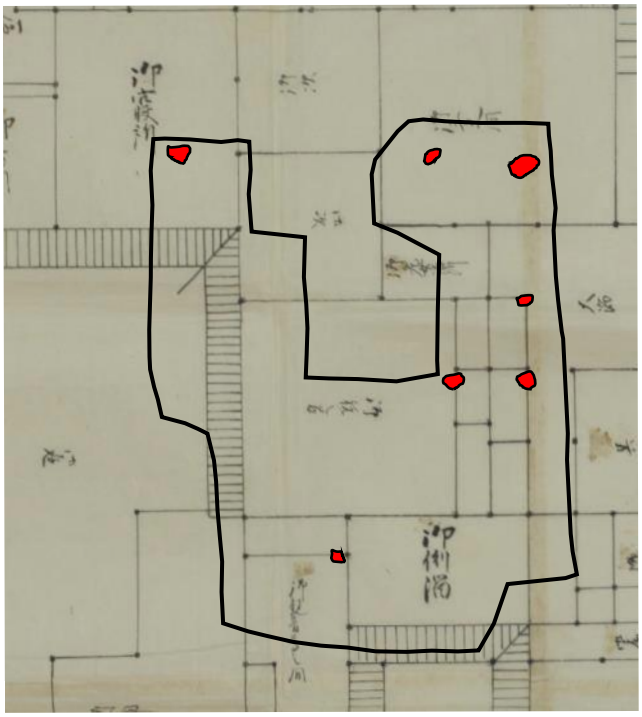
礎石検出状況

赤瓦出土状況

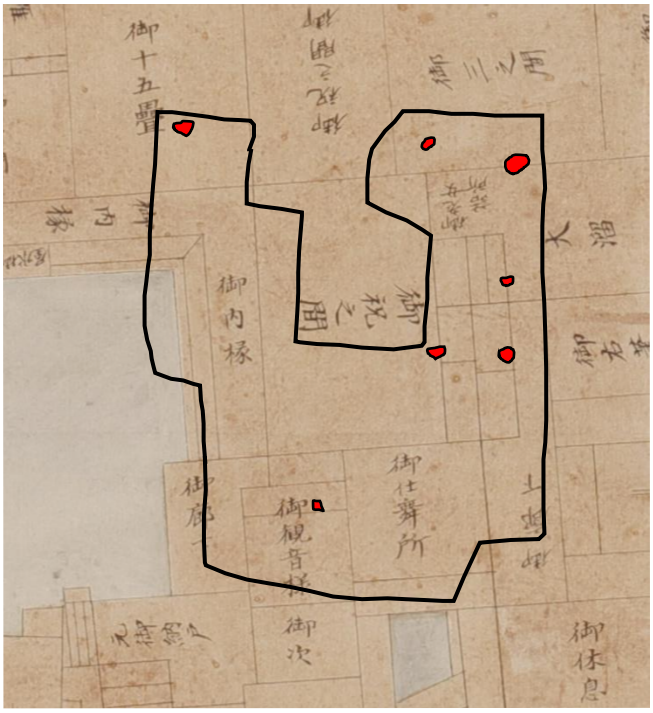



第５図　第47次調査区　合成図(S＝1:100)

「盛岡城本丸図」(一部抜粋・加筆、もりおか歴史文化館所蔵)江戸最末期



第6図　「盛岡城本丸平面図」(一部抜粋・加筆)
天保5～13年(1835～1842)頃



第7図　「盛岡城明細図」(一部抜粋・加筆)
文政8年(1825～)以降

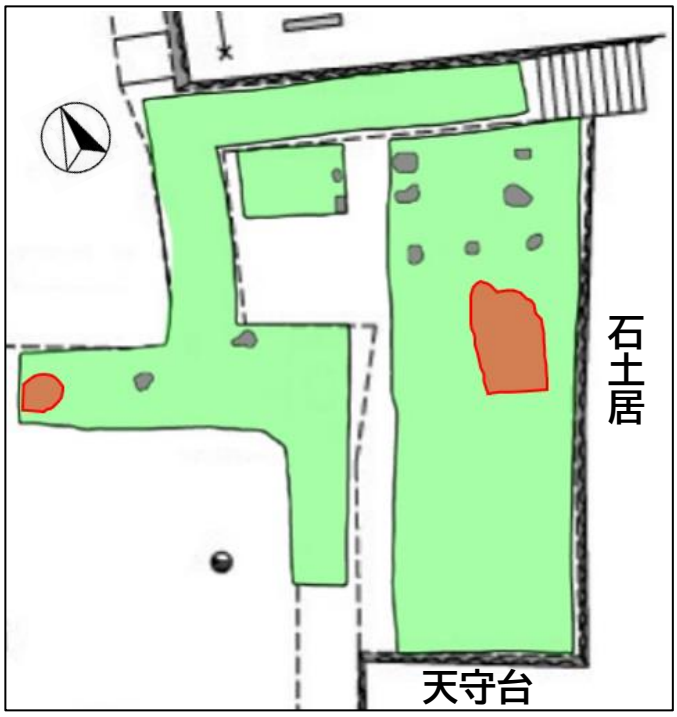
## ○防空壕跡

本丸南西隅には天守台（櫓台）が存在します。天守台から北に続く石土居の西下部に、防空壕跡が発見されました。

令和4年度の調査では、礎石建物跡の検出面においてガラス瓶などを多く含む撹乱として発見されていましたが、今回掘り上げを行うと、縦 2.6 m、横 2m、深さ約 1 mの竪穴状の防空壕跡であることがわかりました。埋土はすべて黒色土で床面まで廃棄物が混入していました。内部にある大きい石は、元々地上にあったものと思われますが、廃棄物が混入する土の上に石が乗っているので埋められる途中で石が投げ込まれたものといえます。

防空壕内に埋められた多量の廃棄物はガラス瓶の完形・破片だけで 220 kgを計りました。そのほかにも猪口や徳利、お菓子の袋など様々なものが見つかりました。その中でも年代のわかるものとして、カードタイプのカレンダーがあります。昭和 34 年（1959）と書かれ、防空壕跡の床面近くから出土しました。

これらのことを踏まえると、戦時中に防空壕として造られたが、戦後（昭和 30 年代以降）、岩手公園での花見や宴会に使用したものを投げ捨てられ、徐々に埋まっていったものであると考えられます。




第8図　第 44 次補足調査　全体図

第 44 次補足　防空壕跡　全景（南から）

発見されたカードタイプのカレンダー

出土した廃棄物

## 5．現地説明会等普及体験活動

○「もりおか史跡・遺跡めぐり」 2024.06.29

○もりおか歴史文化館協力事業 「盛岡城跡めぐり」2024.09.29

○「国史跡盛岡城跡　現地説明会」 2024.11.02

## 6. まとめ

・ 三ノ丸北西部北面石垣は、記録が残っている宝永2年（1705）の石垣修復から約 300 年を経て、今回4ヶ年にわたる修復工事が完成しました。300 年以上崩れない石垣を築いた江戸時代の技術力に感心しつつも、修復範囲が限定される難しい工事を完遂させた現代の石工職人の高い技術力を感じました。この 4 年間で発掘調査・記録調査してきた盛岡城の石垣の構造や特徴、解体時・積上げ時に判明したことなどを今後まとめ、将来盛岡城の石垣修復の際に参考となるようにしていきたいと思います。

・ 本丸地区は明治時代以降様々な改変を受けており、江戸時代の遺構の残存状況が不明確です。今年度の調査では、本丸南西部から江戸時代の本丸御殿に伴う礎石が確認され、江戸時代の層が残っていることがわかりました。一方南西部では、戦時中から昭和にかけての岩手公園の利活用の痕跡が発見されました。

# 木節遺跡（きっぷし）　第7次調査の概要
## －新たに判明した平安時代の焼き物の里－

盛岡市遺跡の学び館　今野公顕、佐々木あゆみ

## 1　はじめに　－木節遺跡第7次調査調査成果－

盛岡周辺の古代史の解像度を数段階上げ、未解明だった当時の人々の暮らしの様子をより鮮明に知ることができるようになる成果です。

**① 確実視される須恵器窯跡の存在**

県内最北の平安時代の須恵器窯跡の存在が確実視できるようになった市内初の調査。
盛岡近隣では紫波町の「杉の上窯跡」、「星川窯跡」が知られていましたが、情報が少ない上に、大規模な市内の平安時代の集落から出土する須恵器の供給元などの詳細は謎だった。

**② 焼失した須恵器工房跡**

・床にロクロを設置した穴「ロクロピット」があった。　＝須恵器工房跡
・火を着けて処分された建物跡。床に屋根材等の炭化材が出土。
　一般に竪穴建物部材は丸太材だが、この建物では製材された角材や板材が多くあり、仕口や継ぎ手など木材をつなぐ加工痕跡もあった。　＝丸太材より格が上。良い建物だった。
・出土した須恵器片が、すぐそばの斜面下に、大きな角石と一緒に投げ捨てられていた。

**③ 膨大な出土遺物**

・失敗品の須恵器、仏器など珍しい土器、窯体（須恵器窯の本体）片など、コンテナ約80箱分出土。
　土器の器形・作り方・胎土などを調べ、窯の個性を抽出することで、他の窯跡出土資料や集落出土資料と比較ができる。
＝工人の技術系譜、供給先消費地、窯経営主体などを考えることで、当時の政治や経済の在り方、盛岡周辺古代社会の様子を明らかにでき、日本史の中での位置づけが一層可能になる。

## 2　木節遺跡　第7次調査の概要

第7次調査は、文化財保護法に基づき、第6次調査（試掘調査）で遺構や遺物を確認したため、工事で地下に遺構遺物を保存できない部分の文化財の記録をとるために実施したものです。

遺　跡　名　木節（きっぷし）遺跡　（略号HKP、遺跡コードLE25-2361）
種　　別　集落遺跡
時　　代　古代（平安時代）
調査地点　上飯岡3地割地内
調査期間　令和6年6月4日から7月26日まで
調査原因　個人住宅建設関連工事
調査機関　盛岡市教育委員会　遺跡の学び館
成　　果　遺構　平安時代：竪穴建物跡1棟、須恵器窯跡関連遺構1ヶ所、遺物包含層1ヶ所
　　遺物　・須恵器（坏、甕（かめ）、広口壺、大甕、長頸瓶（ちょうけいへい）、わずかに小型壺、小型蓋（ふた）？、托（たく）？、小皿、底部台状坏、など）
　　・あかやき土器（坏、甕、大甕）
　　・土師器（内面黒色処理ありの坏や高台付坏）
　　・窯体片　　・・・・合計コンテナ約80箱
　　時期　平安時代　・　9世紀後葉～10世紀、11世紀　（現在整理作業中）

## ３ 木節遺跡周辺の主な遺跡（図１）

- **湯壺遺跡**：老人福祉施設建設に伴う発掘調査で、縄文時代晩期の集落跡が見つかった。
- **高館古墳群**(市指定史跡)：飯岡山麓丘陵上に位置する8世紀の末期古墳群。川原石を小口積みした石槨から、土師器、須恵器、蕨手刀、轡、水晶切子玉などが出土したと伝わる。径3.5m、高さ1.5mほどの土饅頭が6基ほど残存したと言われており、昭和42年に調査された1基が現存。[1]
- **志波城跡**（国史跡）：古代陸奥国最北最大級の城柵（軍事と行政の役所）跡。延暦22(西暦803)年に、桓武天皇の命を受けた坂上田村麻呂が造営。当時の政府は統治外の東北にいた人たちを蝦夷と呼び、歓待したり軍事作戦を行うために城柵という役所を20数カ所設置した。志波城は軍政府である鎮守府機能も担った可能性があるが、桓武天皇の行財政改革（徳政相論）による大規模軍事作戦の停止や雫石川洪水のため、811年頃には「徳丹城」（矢巾町西徳田）を造営し機能移転した。この徳丹城も9世紀前葉までに廃止され、後は胆沢城（奥州市水沢）が県央県北域の統治を担った。志波城跡は、1976年に東北自動車道建設を契機に発掘調査が開始され、現在は志波城古代公園として往時の姿の一部が復元整備されている。
- **飯岡林崎Ⅱ遺跡**：圃場整備や県道拡幅に伴う調査で、平安時代・9世紀初頭～前葉の集落跡を調査。須恵器が多く出土し、9世紀前葉頃の円面硯も出土。[2]
- **館野前遺跡**：平安時代9世紀後半の集落跡や、江戸時代の礫石経塚が出土 。[3]
- **一本松Ⅱ遺跡**：市場接続道路建設に伴う調査で、平安時代の集落跡を調査。[4]
- **大島遺跡**：市場建設に伴い発掘調査。平安時代9世紀半ば～10世紀の拠点的集落。石帯(官人が革ベルトに付ける飾り)のほか、木製鋤、あかやき土器羽釜など出土。[5]
- **アイノ野遺跡**：都南村史に須恵器窯跡の可能性が指摘されている。[6]
- **飯岡館跡・飯岡山館跡**：戦国時代の飯岡氏の居館跡と伝わる。

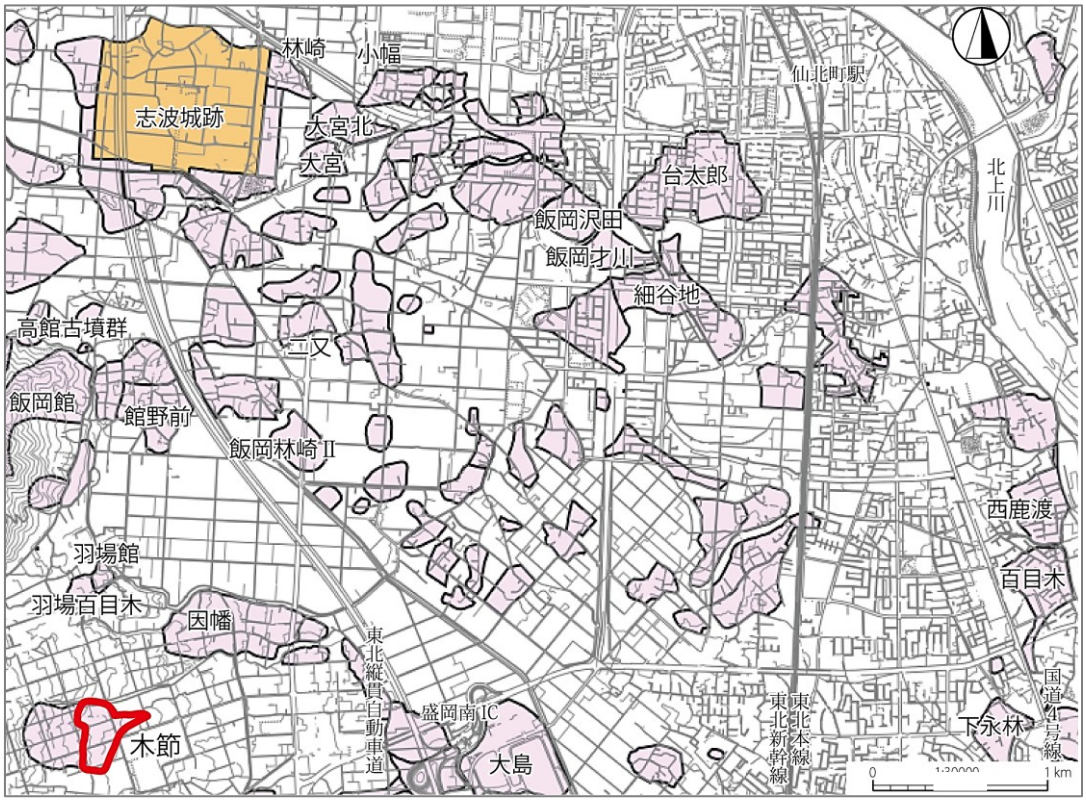



図1　木節遺跡の位置と周辺の遺跡分布

## ４ 木節遺跡の概要（図2）

木節遺跡は、盛岡市の南西部、上飯岡・羽場地区に位置します。西側丘陵地から広がる扇状地の斜面にあたり、市街地を一望できます。遺跡北側には、木伏川が東流しています。

周辺は、戦後1945～1951年に飯岡野耕地整理組合による耕地整理や復員就業対策の開墾入植がされました。この際に農道や農地が整備され、現在の景観になったようです[7]。今次調査区付近には湧水があったという記録もあります[8]。

今次調査区西方では、昭和44(1969)年に農地の深耕しの際に土器が多数出土したため、当時の都南村教育委員会が発掘調査を行い、竪穴建物跡1棟が見つかり、平安時代の土師器や須恵器が出土した、という記録があります[8]。その後、りんご改植、防火水槽整備、下水道整備、農業施設建設などに伴い、盛岡市教育委員会が発掘調査を行い、平安時代の竪穴建物跡などが見つかっています。

盛岡工業高校付近では、融着したり歪んだりした須恵器窯由来の須恵器が採集できることが知られており、平安時代の須恵器窯跡が付近に存在する可能性が指摘されていました[9]。

図2　木節遺跡周辺の地形と主な遺跡分布（国土地理院ウェブサイトより　加筆）

＊　須恵器の窯を営むには次の条件が必要です。すべてをみたす木節遺跡は、須恵器窯操業の好適地と言えます。 ①燃料(薪となる森林)、 ②材料(良い粘土)、 ③水、 ④消費地。

＊　図2中の白太文字遺跡から出土した須恵器は、胎土の科学分析結果から、木節遺跡の窯で生産された可能性が指摘されました(7成果と予察 参照)。

＊　一説には、「きっぷし」はアイヌ語地名で、「アシの生える場所」(キ＝「アシ・カヤ」＋ウシ＝「場所」)との意味が考えられるそうです(アイヌ語地名解釈の中には現地名を無理にアイヌ語に当てはめた解釈もあるので要注意。)。アイヌ語地名は北海道のアイヌがいたことを直接示すものではありません。アイヌとは、中～近世以降に北海道以北に住み、独自の文化を持って暮らした人たちを指すもので、北東北の古代蝦夷とは、時期も異なり直接的な関係はありません。

蝦夷とは、古代(飛鳥～平安時代)の政府の、北東北にいた人たちの呼称です。人種的な意味ではなく、国家統治範囲外の東北に住んだ人たちを区別する意図で用いた政治的な言葉でした。当時の文献記録には「夷語に精通した通訳」の存在も見え、蝦夷の話し言葉は後のアイヌ語のようだった可能性があり、アイヌ語地名とは当時の地名が今に残った物の可能性が考えられます。

## 5　木節遺跡のこれまでの調査　（表1、図3）

遺跡西部の調査（村’69、1次）では竪穴建物跡から平安時代の土器が出土しました。

遺跡東部の調査（2、3次）では、平安時代の竪穴建物跡を中心に、東西に並行して延びる溝跡が検出されました。この並行して延びる溝は、幅9mほどの道路跡の可能性も考えられます。

遺跡中央部の調査（5、6・7次）では、須恵器窯跡関連の遺構遺物が出土しています。

表1　木節遺跡調査実績

| 次数 | 種別 | 調査原因 | 面積（㎡） | 期間 | 検出遺構・遺物 |
|---|---|---|---|---|---|
| 都南村 ’69 | | 農作業 | - | 1969.11.29-12.06 | 平安　竪穴建物跡 1 |
| 1 | 試掘 | リンゴ改植 | - | 1992.12.01-12.02 | 平安　竪穴建物跡 1、溝跡（掘削制限保存） |
| 2 | 試掘 | 防火水槽建設 | 120 | 1993.09.30 | 平安　竪穴建物跡 3、溝跡（位置変更保存） |
| 3 | 試掘<br>本調査 | 汚水管敷設 | 176 | 1995.11.13-12.20 | 平安　竪穴建物跡 1、土坑 2、<br>時期不詳　溝跡 3、柱穴 2 |
| 4 | 試掘 | その他開発 | 240 | 1995.12.01 | なし |
| 5 | 試掘 | 農業建物建築 | 200 | 1996.7.3-11.15 | 須恵器窯跡？（設計変更保存） |
| **6** | **試掘** | **個人住宅建築** | **53** | **2023.11.16** | **竪穴建物跡 1、須恵器窯跡関連、土坑 2、遺物包含層（一部遺構面保存）** |
| **7** | **本調査** | **個人住宅建築関連** | **86.6** | **2024.06.04-07.26** | **竪穴建物跡 1、土坑（物原）、遺物包含層** |

## 6　木節遺跡　第7次調査　（図3・4、図版1・2・3）

### (1)RA06竪穴建物跡　－須恵器工房跡

竪穴建物跡は、一辺約5mの方形のものでした。北側は後世の掘削を受け残っておらず、北東側は調査範囲外へ続きます。

床面から炭化材と焼土が多く出土したため、焼失し遺棄された建物跡と考えられます。しかし、遺物がほとんど出土しなかったため、失火ではなく焼却処分された可能性があります。

床面出土炭化材の多くは、竪穴建物の部材で、板材や角材が多くみられました。ほぞ組加工痕跡がわかるものもありました。

床面中央付近にはピット(穴)がありました。上端径が約36cm、竪穴建物跡床面から底面までの深さが約30cm、さらに底面に径15cm、深さ14cmの円形のくぼみがありました。この形状や埋土に少量の炭化物が含まれたことから、ロクロピット（土器を作る回転台を設置した穴）と言えます。

ロクロピットがあったこと、周辺から窯跡由来の遺物（融着したり歪んだ須恵器破片）が出土していることから、RA06竪穴建物跡は須恵器工房跡だったと言えます。

RA06竪穴建物跡

床面出土炭化材

ロクロピット

図版1　木節遺跡第7次調査　RA06竪穴建物跡

図３　木節遺跡調査全体図

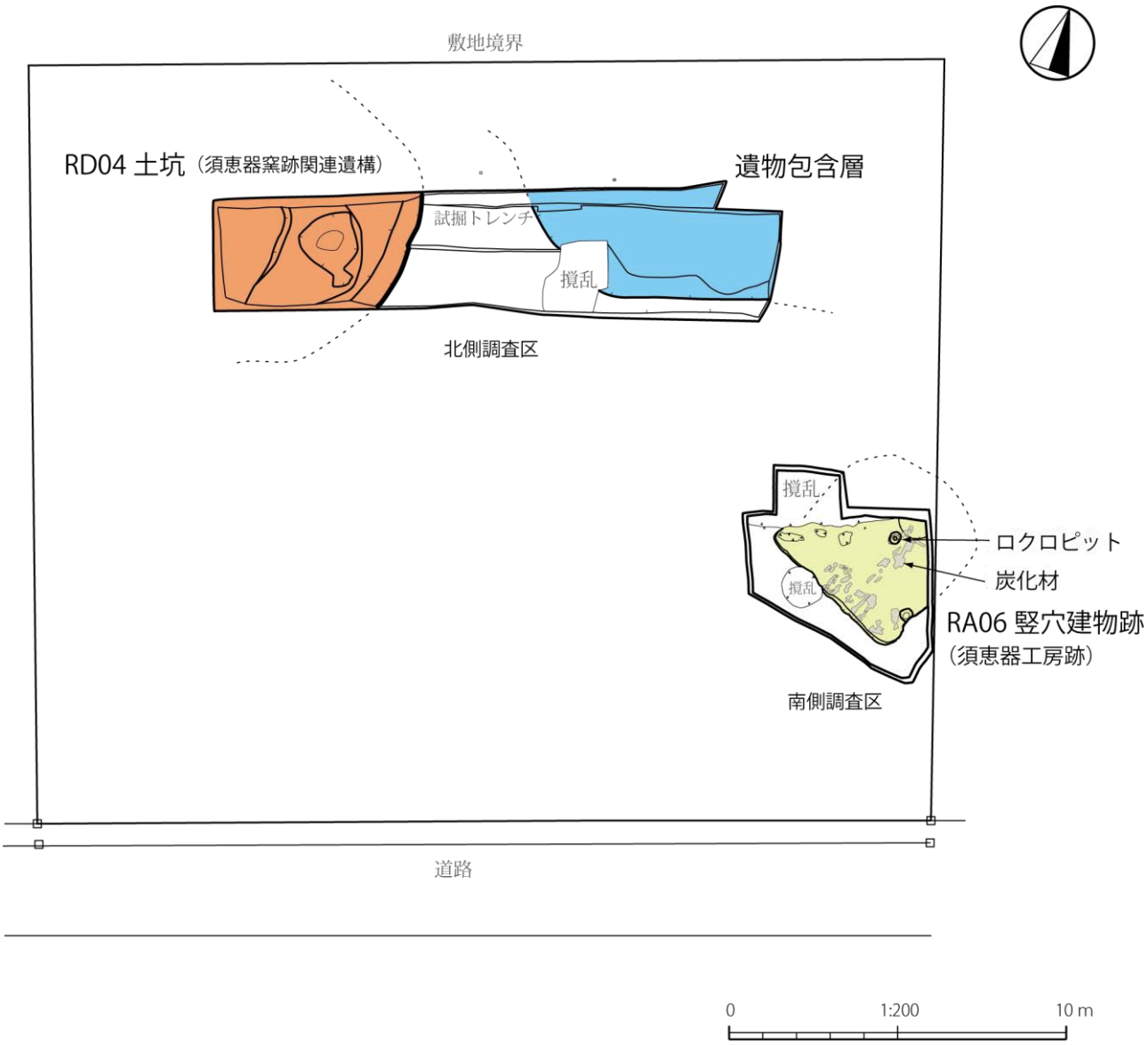
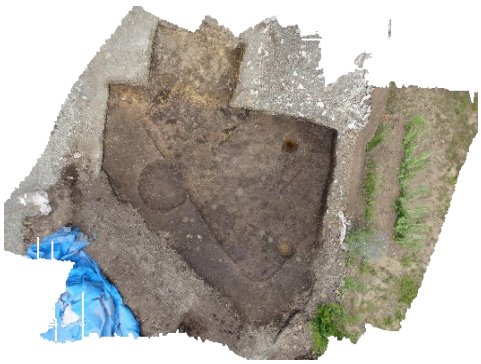



図4　第7次調査全体図



RA06竪穴建物跡全景

RA06竪穴建物跡
炭化材検出状況（北から）

遺物包含層遺物出土状況
（写真上が斜面上部）（北から）

図版2　木節遺跡第7次調査

## (2)RD04土坑　－窯跡関連遺構。粘土採掘坑土坑の須恵器窯の物原への転用

規模は、長軸6.0m以上、短軸3.2m以上、検出面から底面までの深さは105cmほどでした。調査範囲外にも連続して広がっています。

埋土や壁面、底面の状況から、土器作りの材料となる白色粘土採掘坑が崩落し使われなくなった後に、西側の斜面上部に近接した須恵器窯の物原（失敗品や窯から出る炭を掻き出して捨てる場所）にされたものと考えられます。

主に9世紀後葉から10世紀代と考えられる須恵器、あかやき土器、土師器などの土器、窯体（粘土で構築された窯本体）破片、炭、焼土、木片などで埋没していました。埋土上層B層には、灰白色火山灰（十和田a火山灰。十和田湖ができた大噴火で東北一円に降下した火山灰。915年または932年（10世紀初頭）の噴火と考えられています。）が含まれます。

出土須恵器は、坏、甕、長頸瓶が多く、わずかに小型壺、蓋(か?)、托(か?)、水瓶の口縁部(か?)などの仏具的な物などが出土しました。あかやき土器の坏や甕、土師器の坏、高台付坏も出土しました。B層の灰白色火山灰を含む層の上と下で、出土遺物に差異があるか現在調査中です。また、B層の灰白色火山灰の上面からは、やや時代の新しい11世紀代と考えられる小皿と底部台状坏も出土しました。

須恵器は、ゆがんだもの、他の土器や窯体と融着したものがほとんどで、窯跡由来の廃棄物と言えます。窯では須恵器を中心に焼成しながら、あかやき土器も焼成していたようです。

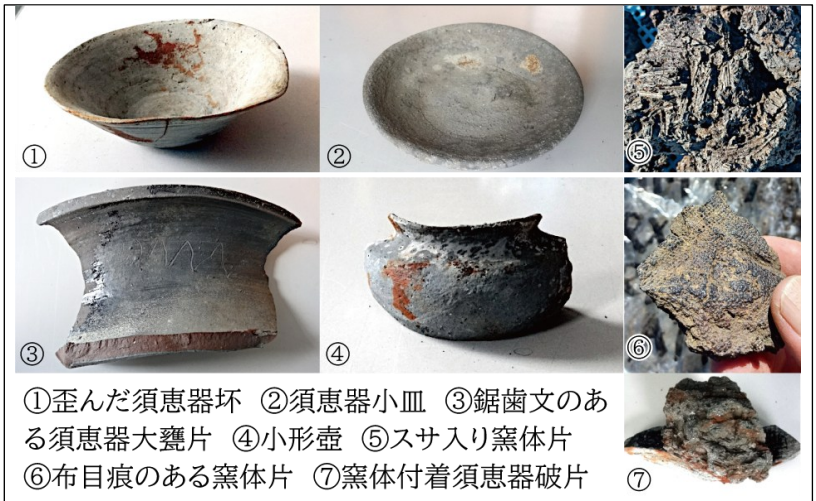
窯体片は、ワラなど植物質のスサが多く混じる焼けた粘土塊です。骨組みの痕跡や布目圧痕が見えるもの、破損した須恵器が融着したものがあります。このほか、土器焼成の際に窯内で土器を支える焼き台として使ったと見られる褐色の粘土塊も出土しました。

## (3)遺物包含層

現在の地形も北東側に傾斜していますが、北側調査区の東寄りは、北東の水路方面へ傾斜する自然低地の谷地のようでした。グライ化（土壌に長期間水が溜まっていたり地下水位が高かったりする場所で、土壌中の酸素が少なくなり、鉄分が還元され、土壌が青灰色から緑灰色になった状況。）した粘土層が堆積した遺物包含層（捨てられたり流れ込んだりした遺物を含む土層。）になっていました。

ここからは、須恵器破片や炭化物などが出土しました。

特に、須恵器大甕と一辺30cmほどの方形の石が、南側斜面上部（RA06竪穴建物跡側）から投げ込まれたかのように出土しました。この須恵器大甕は、RA06竪穴建物跡出土の破片と接合したことから、RA06竪穴建物を廃絶する時に、斜面下方へ須恵器の大甕破片と方形の石を共に投げ捨てたものと推察されます。




①歪んだ須恵器坏　②須恵器小皿　③鋸歯文のある須恵器大甕片　④小形壺　⑤スサ入り窯体片　⑥布目痕のある窯体片　⑦窯体付着須恵器破片

図版3　木節遺跡第7次調査　出土遺物

## 7　第7次調査成果と予察

木節遺跡は、今次調査で①大量の須恵器片と大量の窯体が出土したこと、②竪穴建物跡にロクロピットが見つかったことから、これまで詳細のわからなかった県内最北の古代須恵器窯跡であると言えます。

### (1)当時の木節遺跡の景観

今次調査区周辺の旧地形は、西側山地から東へ延びる尾根と、その北の小川へ傾斜する斜面だったと考えられます。

この尾根上に須恵器製作工房が建ち、北側を流れる沢や木伏川に向かって傾斜する斜面上部に須恵器窖窯（あながま）や焼成土坑が構築され、斜面下で粘土採掘を行い、沢や谷地を物原・灰原として利用していた当時の様子がうかがえます。周辺の木は燃料として使う薪として、悉く伐採されていたことでしょう。

遺跡内の今次調査区以外で見つかった竪穴建物跡は、工房のほか、管理事務所、工人や薪を伐ったり粘土作りをしたり働く人たちの居住などの機能が考えられます。

【参考】　生成 AI（Google Gemini）に作成させた平安時代の須恵器窯と工房集落の景観想像図

### (2)操業時期の一案（表2）

出土土器の整理作業に着手したばかりで詳細は不明ですが、現段階の予察を示したいと思います。今後の整理作業の進捗によって、この時期の考えは変わる可能性があります。

出土遺物の観察から、今次調査区の近くには、次の大きく3時期に、複数回、断続的に須恵器や焼き物を焼いた窯が営まれた可能性が推察されます。

表2　木節遺跡第7次調査出土資料の時期の予察

| | | |
|---|---|---|
| Ⅰ期 | 9世紀後葉～10世紀初頭 | 坏類などの食膳具、長頸瓶や大甕などの貯蔵具、精緻な仏器も焼成した時期。 |
| Ⅱ期 | 10世紀代 | 大甕や長頸瓶など貯蔵具を主体に焼成した時期。 |
| Ⅲ期 | 11世紀 | 小規模な開放型の焼成土坑で、小皿や底部台状坏を焼成した時期。 |

### (3)工人技術の系譜　－製作技法の分析　（図5、6、7、8）

各器種（図5）の製作技法の特徴を抽出し、他の窯跡（図6、7）との比較をすることで、工人や技術がどこからもたらされたのか、推測することができます。

具体例として、①坏（器形、切り離し方法（切り離し具、糸切り回転方向、糸切り位置（中央か端部か））、内面調整のコテ状工具使用有無など）、②高台坏（高台の付け方、接地面の違いなど）、③長頸瓶（頸部の作り方、頸部凸帯の形状と有無、高台の有無や形状と付け方（断面形、放射状文（菊花文）有無など）、体部外面手持ちヘラケズリ調整の有無）、④甕（口縁部の形状、頸部の文様や記号の有無、体部の叩き成形の当て具の特徴（同心円文（青海波文）、放射状文（蓮藕文）、平行文、無文など）など、多くの須恵器製作技法の特徴を検討する必要があります。

現段階で指摘できることとして、（ア）長頸瓶の底部に、ロクロに砂を敷いて成形した砂底に高台を貼り付けたものがあること、劣化した放射状文（菊花文）がみえるものがあること、(イ)大甕に放射状

文（蓮藕文）、平行文が見られることが特徴です。この(ア)の特徴は、出羽（秋田県域）の影響が考えられますが、より一層の木節窯跡の特徴抽出と他の窯跡出土資料との比較検討が必要です。

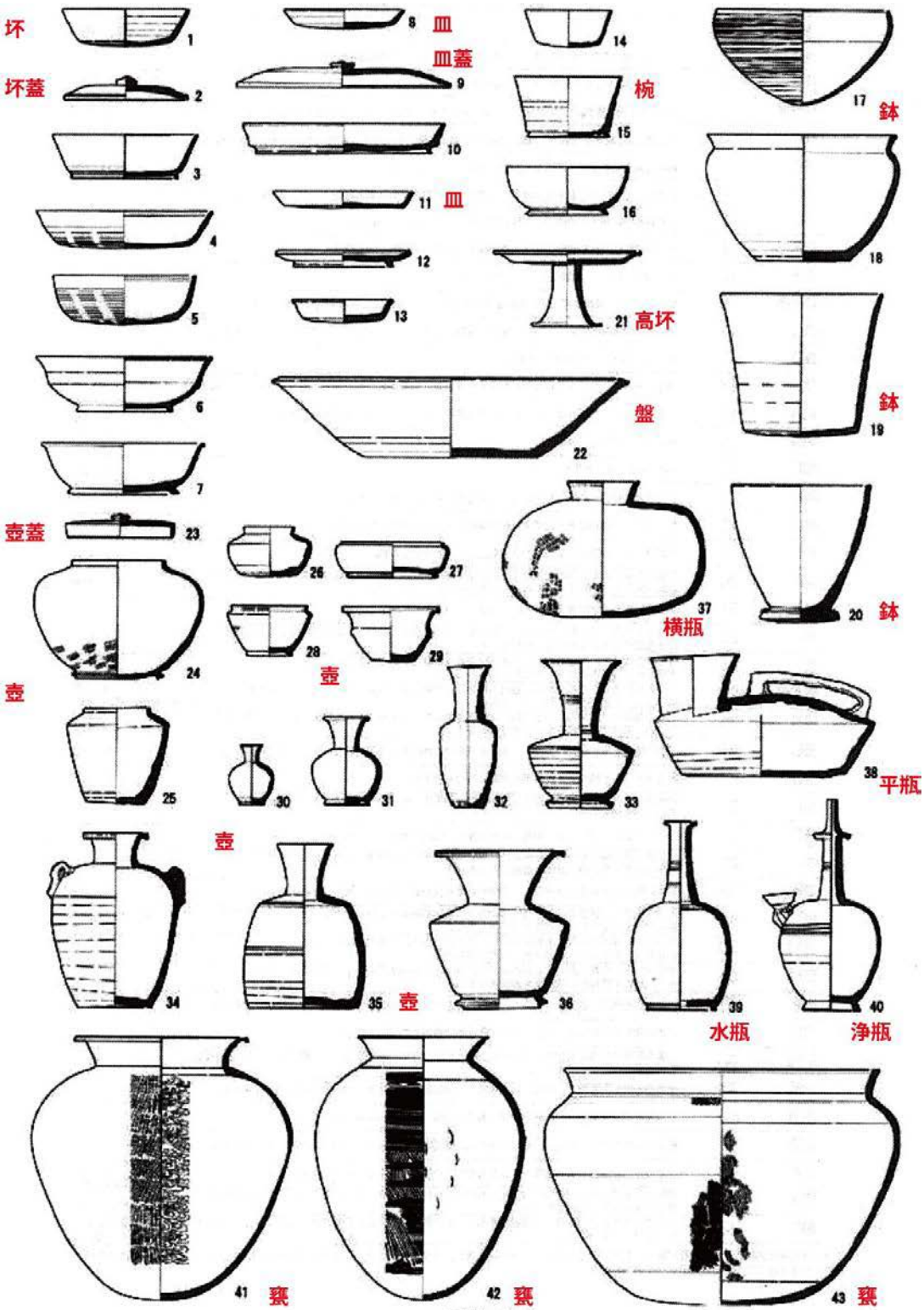



図5　須恵器の器種
（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 2005『平城宮発掘調査報告 16』奈良文化財研究所学報 70　に加筆）

図6　岩手県内の主要須恵器窯跡

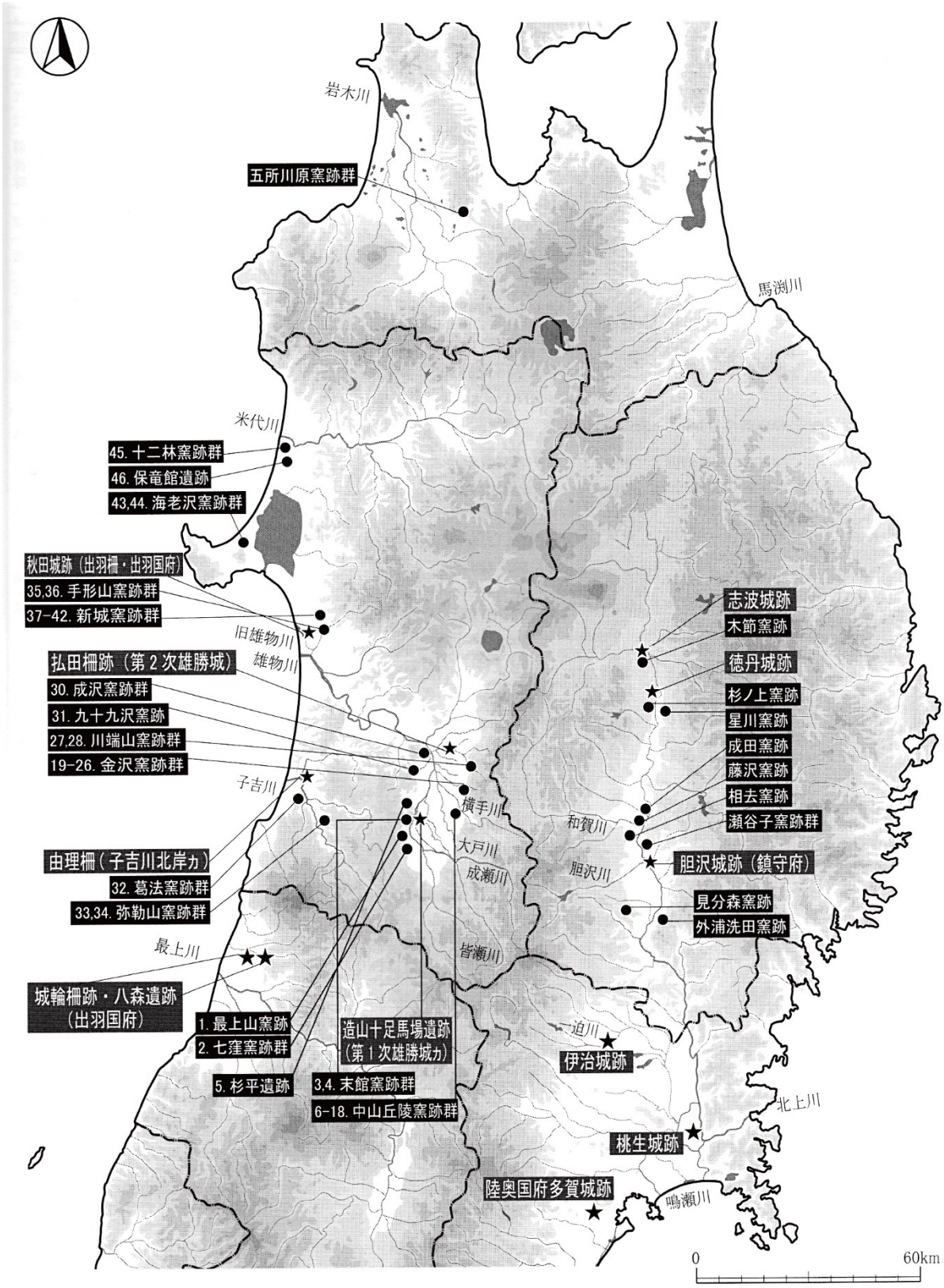



図7　北東北の主な須恵器窯跡位置図

（島田祐悦2025「秋田県の須恵器窯跡と器種組成」『古代蝦夷と須恵器-北東北・北海道-』高志書院 より）

## (4)供給先について　－器形と胎土の分析　（図5･6･7、図版3）

木節遺跡出土土器の特徴（器形や胎土など）と同じ特徴をもつ土器が、どこの遺跡から出土したかを調査する必要があります。

出土土器の考古学的な詳細な器形分析は未着手であること、胎土の科学分析も少量しか実施できていないため、今後作業を進めることで一層明らかにできると考えられます。

今次調査終了後に、今次調査出土須恵器破片と市内遺跡出土須恵器破片の胎土の科学分析を実施しました。この胎土科学分析の速報では、分析した土器群のうち、大島遺跡、二又遺跡、猪去館遺跡の須恵器胎土の化学組成が木節遺跡出土須恵器のそれと近似した特徴が検出され、「木節遺跡の窯跡で生産されたものである可能性がある」との報告がありました。

ただし、科学分析では粘土中に含まれる元素を比較するため、その時使った粘土への混和剤の混入差などにより異なる結果が出たり、同じ丘陵地の粘土を材料としていれば近似した結果が得られたりする可能性が考えられます。

木節遺跡や分析した須恵器と同じように、胎土がレンガ色で黒色や白色の粒を含む須恵器は、盛南地区遺跡群をはじめ、市内各地や県北域での出土が知られており、器形など考古学的な調査と胎土分析を進め、流通範囲を考えることが期待されます。

## (5)窯の経営主体 －政府と連携した在地有力者の存在

古代の須恵器窯の経営主体について、推察される供給先、当時の政治体制、これまで調査された集落の様子をヒントに、現段階の予察を考えてみます。

須恵器窯の経営主体は、供給先によって、①城柵や官衙など行政府主体の「官営」、②行政府と集落両方に供給された「半官半民」、③集落主体への「民営」が考えられます。

①官営は、行政府造営と共に工人を連れてきて、儀式で使う器や建物の屋根に使う瓦、そして未服属の蝦夷の服属儀礼での使用や配布するために窯を設置しました。②半官半民は、行政府が主導しつつ在地有力者と共に、官と地元住民や未服属蝦夷への需要に応じた製品を焼成したことが想定されます。③民営は、在地有力者が地域内の需要に応じて工人を招聘し操業したことが想定されます。

これは出土する機種構成にも特徴が現れます。①は儀式で用いる坏、高台付坏、蓋、埦、文具である硯などが含まれます。③であれば食膳具である坏はもとより、甕や長頸瓶等の貯蔵具が多く含まれる特徴があります。

予察時期のⅠ期：9世紀後葉～10世紀初頭の盛岡周辺（雫石川以南）は、すでに9世紀前葉までに志波城（市内下太田）と徳丹城（矢巾町西徳田）が廃絶し、胆沢城（奥州市水沢）に北東北の軍事と行政を司る鎮守府が置かれ、盛岡周辺である「斯波郡（しわぐん）」の統治も胆沢城が担っていた時期です。

この9世紀後半以降の盛岡周辺の集落は、多くの集落の中に拠点的な集落が発生してくる時期であり（林崎遺跡、大島遺跡、細谷地遺跡、堰根遺跡など）、地域統治を胆沢城の鎮守府に委任された在地有力者の存在が指摘されています[10]。彼らは政府と繋がりを持ち、在地における官人的な権力のもと地域を治めたと考えられます。大島遺跡では官人が身につけた石帯具が出土しています。信仰でも、林崎遺跡や細谷地遺跡で万灯会に使う灯明器や仏器と考えられる多嘴瓶、「寺」字墨書土器が出土しています。有力者の葬送に末期古墳だけでなく火葬が導入されるのもこの頃以降です（飯岡沢田遺跡、乙部野遺跡）。在地有力者が仏教を信仰し、僧侶を招聘する宗教儀式も主催できる財力や権力を有するようになったことがうかがえ、当然須恵器窯も操業したことが想定されます。

木節遺跡の出土資料分析はこれからですが、坏が一定量出土していること、仏器が出土しているこ

と、甕や長頸瓶など貯蔵具類も一定量含まれること、近い行政府は胆沢城もしくは払田柵ですが、それぞれ近くに窯跡が確認されていることから城柵などの行政府への供給が目的とは考えにくいことから、在地有力者による③民営が想定されます。

その有力者の本拠地は、役所的な要素と宗教権威的な要素が強い遺跡が考えられます。つまり、官人的要素の強い石帯具が出土した大集落の「大島遺跡」（羽場）、「寺」字墨書土器や多嘴瓶、灯明器、大型掘立柱建物跡が見つかっている「林崎遺跡」（下太田）、多嘴瓶や灯明器などが出土し、総柱の倉庫の掘立柱建物跡や近隣に祭祀域（向中野館遺跡）や墓域（飯岡沢田遺跡・飯岡才川遺跡）の見つかった「細谷地遺跡」（向中野）などが想定されます。そして、この木節窯の製品供給範囲は、その有力者の権力範囲をも示唆する可能性が考えられます。

## （6）まとめ　－新たに判明する古代史の1ページ

盛岡市内及び周辺の9世紀以降の集落遺跡からは、多くの須恵器が出土します。しかし、その供給元や流通経路は不明でした。これまで知られていた盛岡周辺の古代の須恵器窯跡は、紫波町の「杉の上窯跡」、同「星川窯跡」だけでしたが、そこに木節遺跡の存在が明らかになりました。

今次調査成果から、木節遺跡は大島遺跡や盛南地区遺跡群などの在地有力者と関係をもって操業され、周辺集落などにも須恵器を供給した県内最北の須恵器窯跡・工房跡だと言えます。

今次調査区の東方の第2次調査区では、道路側溝跡の可能性のある東西に併行して延びる溝が2条見つかっています。これを北へ延長すると飯岡林崎Ⅱ遺跡の横をとおり志波城跡や林崎遺跡方面へ延びます。南に延長し尾根を降りると、大島遺跡があります。

今後、出土資料の詳細な調査や分析と、科学分析（今次調査及び市内遺跡出土須恵器片の胎土分析、竪穴建物跡と土坑出土炭化物のAMS年代測定）の結果等を踏まえ、周辺の遺跡との関係も検討することで、より一層古代の盛岡周辺の様子が明らかにできると考えます。

なお、資料数や調査検討項目が膨大なことから、整理作業や報告書作成には、今後1～2年ほどを要することが想定されます。

今回の報告と今後新たにわかる歴史は、多くの市民のみなさんと共有し、盛岡の古代史や地域の歴史遺産に一層関心を深めていただくきっかけになればと思います。そして、皆様にはこれら知ったことを、ぜひご家族やご友人など多くの人たちにお話いただき、広く共有していただければ幸いです。

## ■須恵器の作り方

RD04 粘土採掘坑底面から出土した粘土

### ①素地（きじ）となる粘土を採取

→木節遺跡周辺からは粘土（白色のものも！）が採取可能。

### ②素地をつくる

粘土に砂粒や植物繊維を混和材として混ぜ入れます。

※現代の陶器作りは、水の中で粘土に含まれる不純物を取り除き精製し脱水。脱水された土は、成形する前に一定期間貯蔵されて寝かされます。（粘土は長い期間寝かせていた方が粘りが出るとか）寝かされた土は、使う直前に土練りをします。

### ③成形する

#### 坏

ロクロの回転で素地土の塊を挽きのばし成形します（水挽成形（みずひきせいけい））。

→木節遺跡では、竪穴建物跡からロクロピットが見つかっています。

成形した物の底部に、ヘラを差し込んだり糸を巻き付けたりしてロクロから切り離します。ヘラ切り、糸切りといいます。糸切りには、ロクロの回転を止めて切り離す静止糸切りと、ロクロを回転したまま切り離す回転糸切りがあります。

→木節遺跡では、糸切りのものしか見つかっていません。

坏の底面に観察できる回転糸切痕→
（木節遺跡出土坏）

#### 大甕

粘土紐を積み上げ、ロクロ回転を利用し土器のおよその形を作ります。その後、内側に当て具をあて、外側を板で叩いて器壁の調整や空気を抜く作業をします。須恵器大甕の器面に模様のように見えるのは、この叩き作業の痕跡です。内面には、当て具の痕跡が残るものがあります。

→木節遺跡では、当て具（アテグ）に同心円文や放射状文、平行文。
叩き（タタキ）に平行文の痕跡が観察できます。

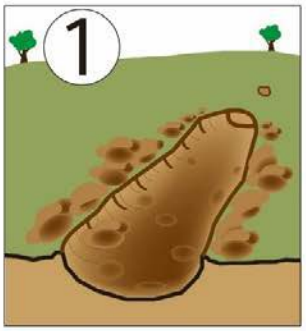
同心円文　　平行文

（木節遺跡出土大甕）

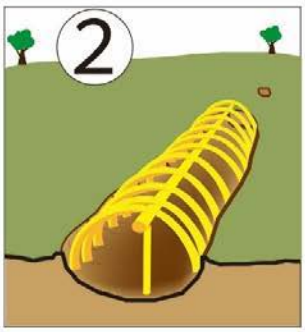
### ④乾燥

### ⑤焼成

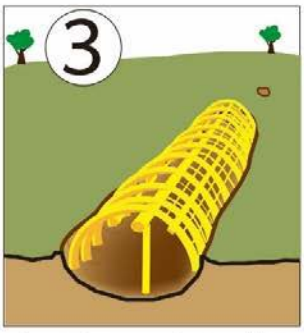
## ■須恵器の窯の作り方



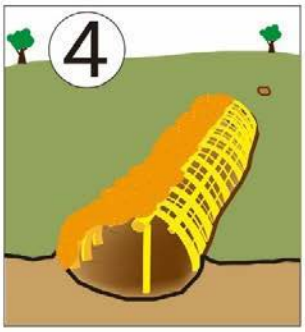

斜面地を利用して荒掘りをする。斜面上部がトンネル状になっている「あな窯」の例。



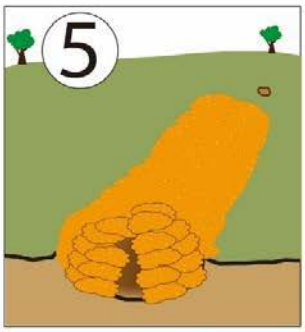

底面を整えたら、天井や壁の骨組みをする。



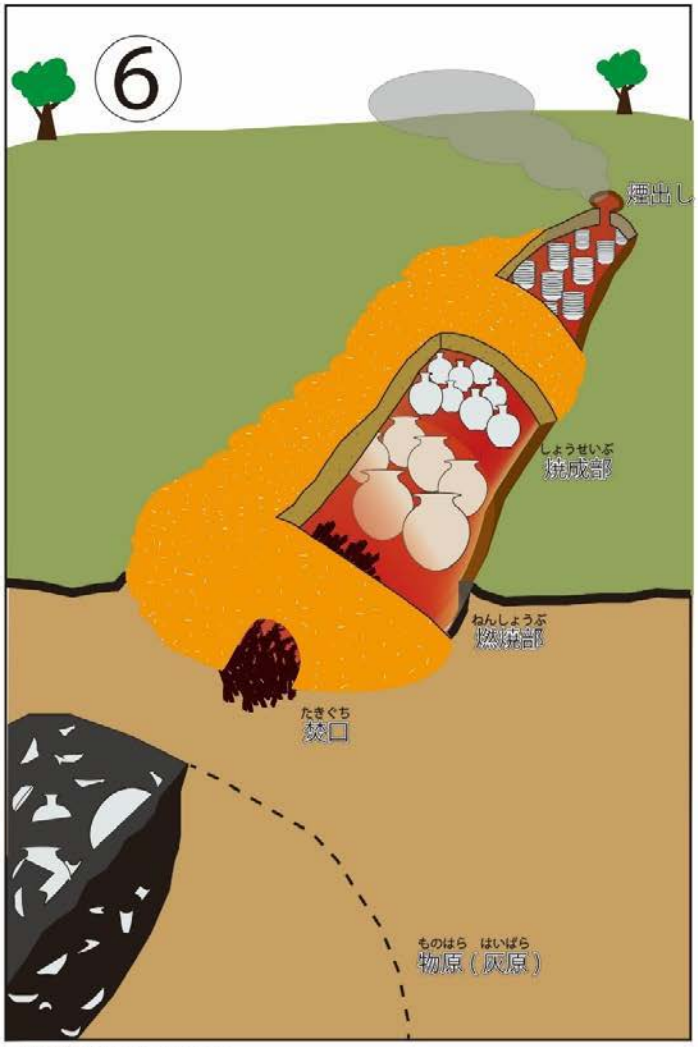

太い骨組みに、細かい横骨（木舞（こま）い）を入れる。




スサ入り粘土を骨組み等に厚く貼り付けていく。




一度乾燥させて支柱の骨組みは外すと思われる。一度空焚きしている可能性もある。窯内に、成形した土器を並べた後、焚口部の土を積んでいく。
（窯の完成）




～窯構造の推定模式図～

1,000 度以上の高温で焼成。最終的に焚口と煙出しを密閉して、窯の中を酸欠状態にして焼き上げる。（還元焼成（かんげんしょうせい））

焼き上がり製品を窯出しする際、破損や変形で商品にならないものを、投げ捨てた場所を物原という。多くは斜面の下に投機していき、掻き出された灰や焼土、窯体の破片などが混ざる。

[1] 都南村 1974『都南村史」 P52
[2] 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『飯岡林崎２遺跡発掘調査報告書(第1･3次調査)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 427
[3] 盛岡市遺跡の学び館 2011『館野前遺跡』盛岡市教育委員会
[4] 盛岡市遺跡の学び館 2008『一本松遺跡　市道釜淵谷地･上野線建設関連発掘調査報告書』
[5] 盛岡市遺跡の学び館 2021『大島遺跡』盛岡市教育委員会
[6] 都南村 1974『都南村史」
[7] 都南村 1974『都南村史」 P489
[8] 都南村 1974『都南村史」 P62
[9] 相原康二 1987「岩手県の古代窯跡研究の今後」『星川窯跡−発掘調査概報−』紫波町教育委員会
[10] 盛岡市遺跡の学び館 2023『第21回企画展「大島遺跡に見る蝦夷(エミシ)社会の変容」図録』

発掘調査は、酷暑の中、行いました。 大雨で調査区が全面水没し、思うように調査が進まない時もありました。
しかし、地域住民対象の調査見学会では多くの方に発掘調査の様子をご覧いただき、「地元にこんな遺跡があったことを知らなかった。」という声が多く聞かれました。
地権者及び地域の皆様のご協力で調査を無事終了することができました。 ありがとうございました。